TOKUMA NOVELS

長篇トラベル・ミステリー

サンライズ エクスプレス

夜行列車の女

西村京太郎

長篇トラベル・ミステリー

夜行列車（サンライズエクスプレス）の女

西村京太郎

江戸川区立図書館

徳間書店

TOKUMA NOVELS

TOKUMA NOVELS

西村京太郎
夜行列車の女（サンライズエクスプレス）

発行者　徳間康快
発行所　徳間書店
東京都港区東新橋一ノ一ノ一六　〒一〇五-八〇五五
電話〇三・三五七三・〇一一一
振替〇〇一四〇-〇-四四三九二
©Kyôtarô Nishimura 1999 Printed in Japan
落丁・乱丁はおとりかえいたします
〈編集担当　吉川和利／販売担当　上村仕之・益子　光〉

ISBN4-19-850470-9

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert

目次

第一章　A個室の女　7
第二章　再会の時　40
第三章　ボディガード　73
第四章　犯行の目的　105
第五章　迷路からの脱出　138
第六章　愛と復讐　171
第七章　終焉への疾走　203

本文挿画・緒方ユージ

第一章　A個室の女

1

カメラマンの木下は、久しぶりに、夜行列車に乗ることになった。

去年の夏に、札幌行の「北斗星」の写真を撮って以来である。

今回は、新しい夜行列車といわれるサンライズエクスプレスだった。新世代のブルートレインといわれている。

飛行便が、終了したあとで、東京を出発し、目的地に、翌朝到着するというのが、この夜行列車のコンセプトだった。

「この列車の快適さと、どんな乗客が、どんな風に楽しんでいるか、取材して来てくれ」

と、「旅と人間」の田島編集長が、いった。

「きっちり、やって来ますよ」
木下が、田島から、サンライズエクスプレスの個室寝台の切符と、取材費を受け取って、オーケイサインをすると、
「一つだけ、いっておくことがある」
という言葉が、返ってきた。
「何です?」
「今日は、いつもの悪い癖は、おさえて、カメラ取材に、専念して欲しい」
「悪い癖って、何です?」
「君の女好きだ」
「別に、悪いことじゃないでしょう?」
「仕事じゃなくて、君が勝手に旅行に行くんなら、何をやっても、君の自由だ。旅先で、女と心中したって構わない」
「心中なんかしませんよ」
「だが、仕事の時は、仕事第一で、やって貰いたい」
「いつだって、それで、やってますよ」
「去年の北斗星の取材だって、どの写真も、列車と一緒に、同じ女が、写っていたじゃないか」
「その方が、いい写真になると思ったんで、たまたま、同じ北斗星で知り合った彼女に、モデルになって貰ったんです」
「こっちは、列車だけの写真が、欲しかったのに、そんな写真が、一枚もなくて、往生したんだ。締切りが迫っていて、新しい写真を撮る時間がないので、我慢したが、あれじゃあ、困るんだよ」
「それなら、最初から、そういってくれれば、いいんですよ。こっちは、列車だけの写真では、寂しいと思って、彼女に頼んだんですから」
と、木下は、へらず口を叩く。
「とにかく、今回は、仕事第一にやってくれ」

と、田島は、釘を刺して、木下を、送り出した。いろいろと、文句があっても、木下というカメラマンを使うのは、それだけの腕を持っているからだった。

木下は、愛用のライカM6を肩から下げ、ショルダーバッグには、他のカメラも入れて、「旅と人間」社を出た。

すでに、午後七時を過ぎているが、お目当てのサンライズエクスプレスが、東京駅を出るのは、二二時〇〇分（午後十時）だから、まだ、ゆっくりと、時間がある。

東京駅の構内の食堂で、少しばかり、おそい夕食をとり、ビールを飲んでから、サンライズエクスプレスの出発する9番ホームに入った。

まだ、列車は、入線していないのだが、乗客の方は、かなり、ホームに入っていた。久しぶりに現われた夜行列車ということで、人気があるのだろう。

今夜のサンライズエクスプレスも、満席だと聞いていた。

ホームの様子を、カメラにおさめている間に、サンライズエクスプレスが、入線してきた。

なるほど、新しい夜行列車という感じのする車体だった。今までは、ブルートレインと呼ばれるように、夜行列車といえば、ブルーの車体だったが、この列車は、ワインレッドとベージュのツートンカラーである。それに、上下二段の窓が、新鮮に映る。

早速、写真を撮っている人たちがいる。

木下は、まず、田島の用意してくれた一人用、A個室に、入ってみることにした。

4号車の階上に六部屋造られていて、急な階段をあがると、左右に、一つずつ、部屋がある。中に入ると、強い木の匂いがした。このA個室に限らず、

全体に、木材が、ふんだんに使われている感じだった。

中は、広くはないが、必要最小限のものは、全て、備わっている感じだった。

ベッドがあり、サイドテーブルと椅子があり、洗面台がある。寝転がって、テレビが見られるように、液晶テレビが、取りつけてある。

掛ぶとんは、羽毛で軽く、机の上には、タオルや、洗面具が、ビニールの袋に入って、置かれていた。

窓が高い位置にあるので、ホームを見下すことが出来て、ちょっとした優越感にひたることが出来た。

ドアには、押ボタンの錠がついている。暗証番号を決めて、開閉できるようになっている。が、木下は、生来の面倒くさがりだから、そんなことには、無頓着に、カメラを持って、ホームへ出ようとして、ドアを開けた。

そこで、女性にぶつかってしまった。踊り場も、階段も狭いから、隣りの個室の主と、踊り場で、ぶつかることになってしまう。

「ああ、失礼」

と、木下は、謝ってから、また、田島のいう悪い癖が出て、じっと女の顔を見つめて、

「きれいな人だなあ」

と、声を出した。

二十五、六に見える女は、笑っている。恥しそうにしないところを見ると、いわれなれているのだ。

新しい車体なのと、自然にドアが閉まるようになっているので、ドアを開けるには力がいる。

踊り場で、木下とぶつかってしまったので、向うのドアが、閉まってしまっていた。

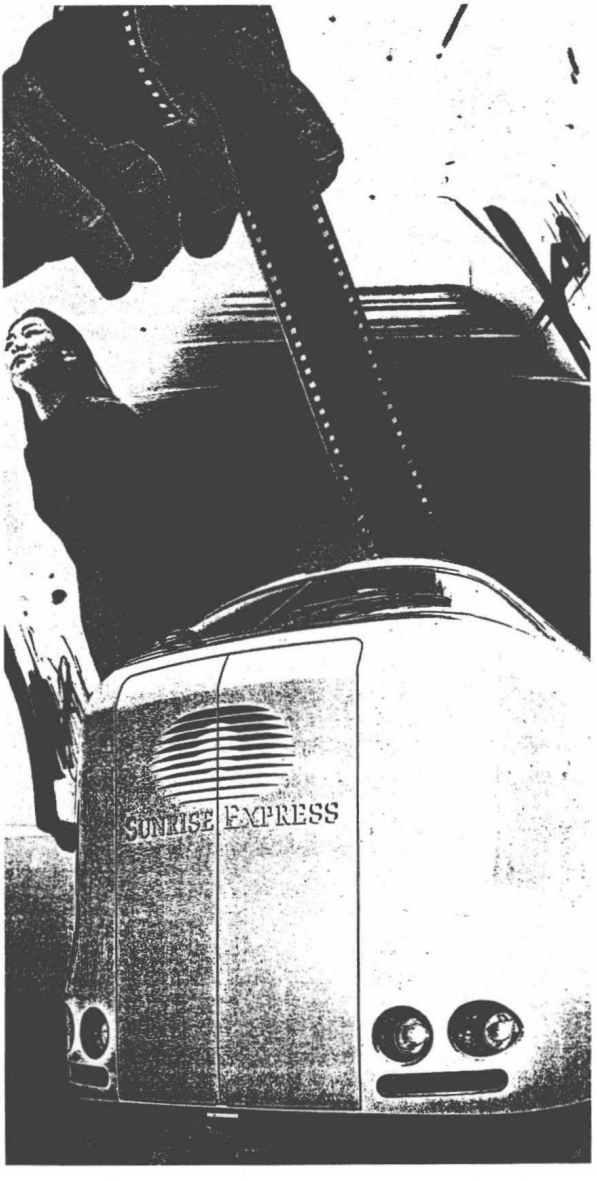
木下は、素早く、それを開けてやって、

「どうぞ」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert

「すいません」
木下は、階段をおりたところで、女が出てくるのを待った。
まだ、列車が出るまでに、七、八分ある。
女が、部屋を出て来た。
「お願いがあるんですよ」
と、木下は、声をかけた。「え?」という顔をしている女に、カメラマンの名刺を渡して、
「実は、雑誌の仕事で、この列車の写真を撮ることになったんですが、タイトルが『夜行列車の女』なんです。時間がなくて、モデルの手配が出来なくて、弱っていたんですが、助かりました」
「え?」
「あなたがぴったりなんだ。助けて下さい。お願いします」
「そんなこといわれても——」
「とにかく、ホームへ出て下さい。時間がない」
木下は、強引に、彼女をホームに連れ出し、列車の前に、立って貰って、バシャ、バシャ、カメラのシャッターを、切っていった。
とにかく、こういう時には、強引にやってしまうのがいいと、木下は、思っている。
発車時刻が来て、木下は、彼女を抱えるようにして、列車に入った。
サンライズエクスプレスは、ゆっくり、東京駅を出発した。
1号車から7号車までが、高松行の「サンライズ瀬戸」で、8号車から14号車が、出雲市行の「サンライズ出雲」である。
十四両編成で、岡山まで行き、岡山で、二手に分れて、四国の高松と、山陰の出雲市に向う。
二つの列車間は、往来できないから、4号車に乗

っているということは、四国方面に行くということだろう。
　木下は、彼女を、自分の部屋に案内し、用意してあった缶ビールをすすめてから、
「とにかく、助かりましたよ。あなたのおかげで、素晴らしい写真が撮れました。ええ、既成のモデルなんか使うより、よっぽどいい写真です。あなたは、美しいし、それに、気品がある。新しい列車に、ぴったりのモデルですよ」
　と、賞めあげ、
「四国の何処へいらっしゃるんですか？」
「道後温泉。そこで、二、三日、のんびりしようと思って」
　と、彼女は、笑顔でいう。
「実は、僕も、道後に行くことになっているんですよ。いいなあ。寂しい、ひとり旅を覚悟していたんですが、道後まで、あなたと一緒に行けるんだ」
　木下は、嬉しそうに、いった。
　田島編集長からは、終点の高松までの切符を貰っているが、別に、四国の取材は、頼まれていない。あくまでも、サンライズエクスプレスの取材なのだ。だから、四国へ入ったあとは、何処へ行こうと自由だと、勝手に解釈していた。
　木下は、手帳を取り出すと、それに、ボールペンを添えて、女に渡した。
「出来上がった写真を送りたいから、住所と名前を、書いて下さい」
「本当に、送って下さるの？」
「もちろん送りますよ」
　木下は、笑顔で、いった。
　彼女は、ボールペンを取って、記入して、木下に返した。


SUNRISE EXPRESS

〈東京都　杉並区　荻窪×丁目
メゾン荻窪　４０７号
永井　みゆき〉

と、きれいな字で、書いてあった。
「みゆきさん？」
「平凡な名前で、ごめんなさい」
と、彼女が、微笑する。
「いい名前じゃないですか。あなたに、ぴったりですよ」
「どんな風に？」
「美しくて、その上、繊細な感じがする」
「名前を、そんな風にほめられるのは、初めて――」
「僕は、いいことは、正直にいう主義なんですよ。とにかく、あなたの名前に、乾杯！」

木下は、ひとりで、はしゃいで、缶ビールを、のどに、流し込んだ。
そのあと、彼女の部屋に行って、室内の写真を、何枚か、撮らせて貰った。
列車は、横浜、熱海（あたみ）と、停車して行く。
熱海を出ると、すでに、十二時近い。それでも、午前一時近くまで話し合ってから、彼女は、自室に戻り、木下も、ベッドに、横になった。
窓のカーテンを引き下し、テレビを見る。ＮＨＫの総合と、衛星放送の三つのチャンネルだけである。しばらく、衛星放送で、サッカーを見ていたが、通信状況が悪いのか、時々、画面が、止ってしまう。それで、テレビを諦らめ、用意されている寝巻に着がえて、眠ることにした。
この列車の岡山着は、明朝の午前六時二七分である。

2

岡山に着く少し前に、木下は、眼をさました。

起き出して、朝の車内風景を、ひと通り、撮った。岡山には、六分停車だから、ホームにおりて、朝の駅の風景も、撮れるだろう。

彼女は、まだ、眠っているらしく、ドアは閉ったままである。

岡山で、サンライズエクスプレスは、高松行と、出雲市行に分れる。木下の乗る、サンライズ瀬戸の方が、先に出発した。

快晴の中を、七両編成となったサンライズ「瀬戸」は、瀬戸大橋を渡る。

台風が近づいていたが、今は、海面も穏やかで、眼下を進む船が、美しい。

女は、相変らず、部屋から出て来ない。

昨夜、一緒に、缶ビールを飲んだといっても、彼女は、一本半ぐらいしか飲んでいない。

(それでも、二日酔いなのだろうか?)

念のために、ドアをノックしてみたが、返事はなかった。

このまま高松へ行くのなら、乗っていてもいいのだが、松山の道後温泉へ行くのなら、次の坂出(さかいで)で、乗りかえなければならないのだ。

木下は、必死になって車掌に、話した。

「本当に、道後温泉へ行くと、いってたんですか?」

と、車掌はきく。

「ああ。道後で、二、三日、ゆっくりすると、いっていた」

「それなら、坂出で、乗りかえて貰わないとね」

車掌は、ドアをノックし、開けようとしたが、錠

がおりている。
車掌は、マスターキーを取り出して、ドアを開けた。
とたんに、木の香りだけでない、何か、嫌な匂いがした。
ベッドに女は寝ていたが、なぜか、顔にまで、ふとんが、かぶせてあった。
「お客さん」
と、車掌は、声をかけながら、その掛ぶとんを、はがした。
鼻血を出した、青白い女の顔が、現われた。
車掌が、ふるえ出した。
木下が、背後から、のぞき込んで、
「どうしたんです?」
「死んでいる」
「死んでる?」
「息をしてません」
「違うよ。この人」
「何をいってるんです。間違いなく、死んでます。とにかく、あなたは、終点の高松まで、行って下さい」
と、車掌は、いった。
午前七時二七分、高松着。
車掌が、電話してあったので、ホームには、香川県警の刑事が、待ち構えていて、どかどかと、列車に、乗り込んで、きた。
小太りの太田という警部が車掌から、説明を聞き、死体を見てから、木下に向って、
「あなたは、この仏さんと、親しくしていたみたいですね?」
「それが、違うんです」
木下は、当惑した顔で、いった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert